

## [034] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10236>

---

出版情報：語文研究. 34, 1972-12-20. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

執筆者紹介

中野三敏	九州大学助教
福井迪子	同 助手
板坂耀子	同 大学院博士課程
狩野啓子	同 修士課程
添田健治郎	同 博士課程

編集後記

語文研究才三十四号を送る。本号には、本年四月就任された中野三敏助教のユニークな論文「見立絵本の承譜」を頭に、福井迪子助手「大江嘉言考」、板坂耀子氏「貝原益軒の紀行文」、狩野啓子氏「『倭人』試論」、添田健治郎氏「アクトセント資料としての謡曲諸本の意義」まで、都合五篇を取めた。一往バラエティに富み、それぞれ興味深い問題を持っている点に注目したい。ある意味では、本年後半のわが研究室における一決算を示すものともいえようか。御批判を頂ければ幸いである。

本年も余すところ旬日となったが、顧みておのがじ感慨するところも数多であろう。個人的なことで恐縮であるが、私は昨年の丁度今頃ストックホルム大学に出講していた。その日本語学科は、今まで町中にあった仮住まいから、山手のフレスカッテイに建設された新構内へ移転したばかりであった。それは、最新設備の開架式図書館を内蔵した九階建て六棟の校舎からなる自慢のものであった。まさに、われわれの持つ施設に比べ、雲泥の差とはこのことであろう。年を越したある日、私は送って頂いた語文研究才三十一、三十二合併号を携えて、その図書出納係を訪れた。以前から顔馴染みの助手兼司書のA嬢が丁度新しい職場にいたので、私とその語文研究寄贈を申し出ると、大層喜んで「タクソミック（大変ありがたい）」と握手してくれた。これで、ささやかながら本誌も外国の大学の図書閲覧室に収まることになったと思うと、ほのぼのとした嬉しさが湧いてきた。向こうも主任教授を介して、引き続きお送り頂きたいというので、帰国後すでに才三十三号も発送したし、もちろん本誌も送る予定である。

私共の学問も、日本という領域内に踰越して、いたずらな鎖国を続けているものではないことを本年度の回顧として、各方面から再認識したいものである。次三十五号の原稿は三月末締切予定、奮って御寄稿あらんことを  
(春日)